

大江健三郎と自衛隊、その持続性

栗原 丈和

暴力への恐怖

大江健三郎はそのデビュー当初から、人間が暴力をいかにに馴致できるのか、という問題を小説やエッセイのテーマとしてきた。たとえばデビュー作の「奇妙な仕事」（一九五七年）は暴力を、必要の無くなった犬を殺すという目的のために用いることを受け止められるかどうかが登場人物たちに問われる小説であったし、完結したものとしては最も新しい小説である「水死」（二〇〇九年）は自分自身に対してふるわれる暴力、自死の恐怖をめぐる小説であった。

本誌前号では、大江健三郎が原子力や天皇制をどのようにテーマとし続けてきたのかを論じた⁽¹⁾。それらは戦前・戦中の社会では暴力そのもの、または暴力を統御するものとして存在したのに、戦後は専ら平和な社会に貢献する、「平和利用」可能なものとすべく暴力的な側面を隠蔽する力が働き続けてきた。国家やマスコミが担ってきたその力に抵抗して、大江健三郎は小説やエッセイで執拗に原子力と天皇制について批判し、その恐怖を訴え続けてきた。

あたかも本能であるかのように大江健三郎は暴力に対して過剰に敏感である。他者にふるわれるもの、また自身がふるうものの両方を含んで、暴力への恐怖・嫌悪、そして暴力から逃れることへの困難・不可能というモチーフが大江健三郎の作家活動の根幹を成している。ただ、そのモチーフの起源は原初的な暴力への恐怖である、という点で共感を得られにくいものであり、それが大江健三郎の小説をわかりにくいものにしていった。ただ、東北・東日本大震災によって原子力への恐怖と嫌悪は、以前よりは人々に分け持たれるようになっただろう。

このような大江健三郎の持続性に対して、社会の側が彼を置き去りにして変化している面も当然ある。今ふれた東北・東日本大震災以後の変化として、大江健三郎の問題意識とは逆方向に社会の意識が変わったのは自衛隊に対する扱いではないだろうか。その変化とは、概略的にまとめめるなら、大きな予算を使いながら有事に本当に役に立つのかわからない軍隊から⁽²⁾、人命救助などに役立つ専門的な能力を持った救助隊というものである⁽³⁾。

後者のとらえ方は、暴力の独占を存在の基盤・起源として持つ国家という観点からすると、日本の担う暴力の一部としての自衛隊という面を忘却したものであり、たとえば大江健三郎にとっては決して肯んじ得ないものである。

本論では、戦後登場した自衛隊という組織に対して、大江健三郎がエッセイでどのような批判を行い、また小説でどのような悪意を發揮してきたか、ということを追いつながら、戦後における自衛隊をめぐる思潮の変化にふれていく。前号の拙論の試みに連なるものである。

出発期について

自衛隊は一九五四年に発足し、大江健三郎は一九五七年にデビューした。大江健三郎の自衛隊への攻撃・挑発は小説家としての出発当初からのものである。

しかし、この冬のはじめ、自衛隊の行進を見たぼくは、軍隊という言葉よりほかに、その勇ましい一群を表現しうる言葉はないと考えたのであった。

そして、軍隊という言葉を冠せられさえすれば、あの戦車をふくむ示威行進は、決して現在の憲法のもとでは許されていいものではないと考えた。(4)

この停滞、それは戦後の日本において再軍備の問題がいかにあつかわれてきたかを考えればきわめてあきらかになる。現在、一九五九年の日本は決定的に軍備をもつ国だ。それは憲法の規定などを歯牙にもかけない強力な軍隊によつてみずからを汚辱にまみれさせている国だ。(5)

これらのエッセイが書かれた一九六〇年前後は、まだ自衛隊の発足からは時間も経つておらず、その存在自体が議論の対象となつていた時期である(6)。なので、ここでの大江健三郎の「許されていいものではない」「汚辱」という言葉は特別過激なものとは言えない。この自衛隊への居丈高な攻撃は「憲法」の記述が日本の再軍備や自衛隊の存在を許さない、ということを根拠としたものである。この時点では、日本国憲法は施行されてからまだ十二・三年しか経っていない。

警察や軍隊といった暴力を認められた組織を「平和」な社会で活かしていくのは、唯一暴力を独占できる存在であるはずの国家にとつて最も重要な仕事の一つである。国内の許されざる暴力に対抗する警察、国内・国外を問わず警察では対処しきれない暴力と切り結ぶ軍隊、それらを運営することそのものが国家の存在理由なのだから。初め批判や議論の対象だったにもかかわらず、時間が経つにつれてなし崩しにその存在が自明のものとなつていくという点では、前号で論じた原子力や天皇制と自衛隊の存在はよく似たところがあ

る。

二つめの引用で日本の「再軍備」を担う「軍隊」とされている自衛隊は、この後発足してから六十年近い時間をかけて、戦後の日本社会に存在するのが当たり前の、または存在をやめれば、たとえば基地周辺の街一つが存続できなくなる、なくてはならない存在となっていく。

まるでそれに符丁を合わせたように、日本の再軍備・軍隊をめぐる大江健三郎のエッセイでの発言は、その後少なくなっていく。もつともそれは、一九六三年に広島市を訪れた後の世界の核状況をめぐる発言（『ヒロシマ・ノート』一九六五年）や、一九六七年に沖繩を訪れた後の米軍基地の存在に象徴される日本の周縁としての沖繩をめぐる諸問題へ取り組むようになった（『沖繩ノート』一九七〇年）ということも関係するのだろう。組織整備・装備の充実を続ける自衛隊、日本の「軍隊」の問題を国内の問題に限定せず、冷戦状況下での国際的な関係の中でとらえるようになった、ととらえられるのだ。

しかし、エッセイでわかりやすく自衛隊批判をしてはいないものの、この「軍隊」の存在は大江健三郎にとつて問題であり続けている。先に書いておくが、方向としては大江健三郎とは逆向きではあるが、同様に自衛隊のあり方に異議申し立てを述べた三島由紀夫の存在もそこには関係してくる。しかし、その点に触れる前に、自衛隊の存在の自明化についてもう少し述べておこう。

自衛隊は批判されて活性化する

さきほど、自衛隊が戦後社会において存在を自明のものとしていった、と書いたが、初めに述べたようにそれをさらに決定的にするのが東北・東日本大震災ではないだろうか。もちろん、一九八〇年代には「シビリアン・コントロール」や「GNP1%枠」という決まり文句を用いた自衛隊の存在ありきの新聞記事やテレビニュースが毎日のように報道

されていた。後にふれる湾岸戦争・カンボジアPKO・イラク戦争・ソマリア沖海賊への対応と続く海外派遣も、自衛隊という組織の運用の仕方が問題になったが、その存在が問われたためにはない。自衛隊の基地のある地域ではその存在は社会的・経済的に欠くことのできないものになっているし、地域振興のために自衛隊の設備誘致を望む地域もある(7)。この点は発電所などの原子力関連施設と重なるところがある。

しかし、自衛隊の存在がマスメディア上でここまでためらいなく肯定的に報じられたことは無かった。一九九五年の阪神・淡路大震災後の法整備によって自衛隊は災害救助の中心となる役割となった。さらに今回の震災の際には、広まり始めていたSNSを媒介にして海外のメディアの報道までが容易に参照されるようになった。ここでは日本国内のマスメディア以上に詳しく自衛隊の救援活動の様子が写真と共に紹介された。たとえば、救助された四ヶ月の乳児と共に制服の自衛官が笑顔を見せている写真は、その報道のされ方を象徴するものである(8)。震災での貢献は災害救助隊としての自衛隊の存在意義を確かに高めた。それ故に「防衛」のための過剰な装備とのかねあいとが財政・予算上の話題になることは避けられないということもあるのだが(9)。

しかし、このように自明化されることは自衛隊という組織にとつて正統なことなのだろうか。もちろん、批判や非難の対象にならない方が、構成員・関係者にとつては精神衛生上の負担が少ない。東北・東日本大震災の際のような感謝と賞賛を受けることこそが望ましい状況と考えることはできる。しかし、構成員・関係者個人の思惑と無関係に、社会における自衛隊はその存在や運用のあり方が、(時に否定的に)議論になることで活性化されてきたように見える(二〇一二年終盤の「国防軍」についての主張は再議論化を目指したものだ、震災後の〈空気〉)の中ではいまだ有効に機能していないようだ)。

前節の大江健三郎のエッセイの引用にあったように、発足当初の自衛隊はその存在自体

が「日本国憲法第九条」で「保持しない」と明言されている「陸海空軍その他の戦力」にあたるのかどうか問題となっていた。自衛隊が旧日本軍の復活ではないか、という危惧を抱く人々によって自衛隊は国会の上だけでなくマスメディア上で議論の対象となった。自衛隊の存在を暴力を担うもの・攻撃的なものとして「平和憲法」に背くもの、いわば日本の恥部・攻撃的なフアロスとして去勢すべきという意見を表明するものと、対米関係においてその攻撃性のゆえにこそ必要である、と主張すべきものとの対立が形成された。フアロスを持たない弱者としての日本に甘んじることにはできないというのが後者の主張であるが、実は初期の大江健三郎の小説はこの主張のコインの裏側のような状況を描いている。初期の小説のいくつかで欧米人に対して無力な立場に身を置く日本人青年が登場する。短篇「人間の羊」（一九五八年）の語り手はバスの中で米軍兵に尻を叩かれ続ける辱めを受け、短篇「見るまえに跳べ」（一九五八年）や長篇「われらの時代」（一九五九年）には欧米人相手の娼婦と同棲する青年が登場する。そこでは日本人青年が、相手を攻撃する術を持たない存在（日本そのもの）として描かれている。

この弱者としての日本というイメージは、大江健三郎においては小説だけではなく前に述べた広島や沖縄についての関心ともつながっている。原爆の被害者である日本、米軍基地のある実質的にアメリカの植民地である日本、日本はあくまでも弱者として描かれている。つまり、自衛隊の必要を唱えるものも自衛隊の存在を非難するものも、日本を弱者として捉えているという認識を共有していたわけである。暴力の担い手たることを新たな戦後日本の要件とするか、暴力の担い手たり得ない日本をこそ出発点とするか、という違いはあるものの、日本を弱者として捉えているという点では基盤を共通しているわけである。

しかし、そういった対立を置き去りにして、自衛隊は戦後の日本社会に着実に地歩を固めていく。また、高度経済成長期以降の日本は植民地になるどころか、「エコノミック・アニマル」、経済的戦争の勝者としてアジア諸国に対してあたかも宗主国のように振る舞

うようになる。日本について弱者・被害者だけでなく強者・加害者たりうる存在を描く方向性が生じてくる。その中で自衛隊に対する議論も、その存在があるべきか否かということに加えて、存在を自明の前提として、「専守防衛」の旗印には適さない高性能至上主義の過剰な装備、背広組と制服組の対立、実際には命令無しには発砲一つできない指示体系がもたらす実効性への疑問なども話題になっていく。この点に関しては、無力性からその有用性を疑う論者と⁽¹⁰⁾、本来持つている実力を発揮できない現状を変えざるべきだという論者⁽¹¹⁾が対立し続けており、だがその対立こそが自衛隊を注目すべき存在にし続けているのは既に述べたとおりである。前号の拙論の論旨と結びつけて言えば、対立によって活性化され続ける、巨大な妥協点、それが天皇制・原子力・自衛隊の共通の姿なのである。

「洪水はわが魂に及び」における自衛隊

時間を現在に近いところまで進めてしまったが、大江健三郎に即していくらか時間を戻ろう。

一九六〇年代の大江健三郎もまた、自分たちを弱者と見なし他者からの暴力を過剰に恐れる若者を描いている。他者に対する暴力を自身の身に纏って暴力への恐怖を克服しようとする「セヴンティーン」(一九六〇年)の主人公「おれ」。暴力に充ちた社会から離れて生きようとし、結局自身が暴力をふるう側に回ってしまう「叫び声」の呉鷹男。さらにそれは、前号でも論じた「洪水はわが魂に及び」(一九七三年)⁽¹²⁾の「自由航海団」で一つの達成を迎える。彼らは強者によって担われている社会から、海へと脱出して無国籍な存在になろうとしているが、一方で彼らは強者に抵抗するために武装した集団でもある。彼らはライフルや手榴弾を手に入れ、自衛官を仲間に取りこみ戦闘訓練を受けもする。そして、彼らは小説の最後で日本政府を脅迫してクルーザーを要求するテロリストになってしまう。

なつてしまふと書いたのは、彼らは自ら望んでテロリストになつたのではなく、メンバーの一人の企みによつてそのような状況に無理矢理導かれてしまふからである。「自由航海団」の中には例外的に中年のメンバーがいる。元報道カメラマンの彼は、突然自身の体が縮め始めたことで社会から脱し「自由航海団」に参加したことから「縮む男」と呼ばれている。彼の体が本当に縮んでいるのか、それともそのような嘘をついて「自由航海団」に潜入したのかは明らかにならないまま、彼は処刑されてしまふ。

もし「縮む男」が本当は体が縮んでいないとすれば、彼の体についての以下のような描写はどのように説明できるだろうか。

かれの視角からは、まずベッドを腿の裏側ですべり降りた「縮む男」が、あらためて侏儒しゆじゆかと疑われるほど背が低く見えた。それも膝で歩いているかのように両足が短く、また胸をかこうようにかまえた両腕が、肱で切断されたほどにも見えたのである。それにくらべて胴体はひどく長く、肩幅の広さ、胸の厚さ、尻の出っぱりは酷たらしいほどなのだ。(第七章 「ボオイ」抵抗す)¹³⁾

「背が低く」「両足が短く」「両腕が、肱で切断されたほどにも見えた」というのは、元々体格的には小柄であったことを示し、しかし筋肉を鍛えることで「酷たらしいほど」の「肩幅の広さ、胸の厚さ、尻の出っぱり」を身につけたという可能性が考えられる。そこで連想されるのは、小柄な体にボディビルで鍛えた筋肉をまとった三島由紀夫の姿である。

「洪水はわが魂に及び」は若者の集団が立て籠もつて機動隊と戦うという展開により、前年に起つた浅間山荘事件との関係で語られることが多く、前号でもふれたように大江健三郎自身も関連性を認める証言を残している¹⁴⁾。だが、それだけではなく三島由紀夫と

楯の会メンバーによる東京市ヶ谷の自衛隊駐屯地への人質を取つての立て籠もりと自決からも影響を受け、それを批判するべく書かれていたのである。

三島由紀夫の鍛えられた上半身と元々の体格故の下半身の貧弱さのずれについては、彼が自衛隊に体験入隊した時に親しくつきあつた自衛官たちの証言がある。訓練の助教をつとめた山内信雄は、上半身を鏡に写してポーズを取り、筋肉を誉められるととまんざらでもない表情を見せていた三島由紀夫の様子を語っているのだが、同時にその肉体について違和感を感じてもいたという。

訓練を終えた三島はよく山内ら助教を風呂に誘つた。(略)

お互い素っ裸となつたところで、山内は、あれ？ と思つた。筋肉標本のように上半身が見事につくり上げられているだけに、どうにも下半身が眼につく。足が細いのである。

のちに陸上自衛隊のトップである陸上幕僚長に昇りつめる富澤暉とみざわひかるは当時富士学校に勤務していたが、三島と一緒に風呂に入った同僚があとでこんなことを口々に言い合っているのを耳にしている。

「筋肉をつけても骨がちっちゃいから、あれは迫力ないわ」

中には露骨に馬鹿にする口調で「みすぼらしい」と言い放つ者もいた。(15)

大江健三郎がこのような自衛官たちの評価を知つていたとは考えにくい、普段の交流の中で似たような印象を抱いていたということは考えられるだろう。

「縮む男」が処刑されたのは、「自由航海団」の銃を用いた武装訓練を撮影した写真が週刊誌に売り、それが実際に掲載されたためだが、彼の目的は「自由航海団」を現在の在り様とは違ふ、社会に対して脅威を与える集団にすることであつた。

——ソノトオリサ、ソウシナケレバナニモカモガ始動シナイカラ！ そのようにして「自由航海団」を巻きこんだんだよ。逃げる、捕まって抵抗する。そこで連中は、おれを訊問しなければならぬだろう？ またすでに連中はおれの抵抗に会って、暴力をふるっているからね。暴力ノ誘イ水ハタツプリ流シコンデアツタワケダ。訊問のあいだもかれらはすぐ挑発されて、おれに暴力を加えつづけたよ。ああやっているうちに後戻り不能の曲り角を通過してしまふんだ。

——しかし……

——シカシ、ナゼソノコトガ必要ナノカ、トイウノカイ？ 逆におれのほうが聞きたいが、あんたはこのまま連中が軍事訓練のマネをしていけば、自然に「自由航海団」が、不良少年どもの集り以上の、独自の組織に飛躍すると思ふかね？

——そうは考えないよ。そのような飛躍がなければならぬと思わないからね。かれらはこのまゝ年をとるまでかわらぬだろうが、それはそれでいいじゃないか？ なぜ無理やりかれらを、独自の組織にむけて飛躍させねばならぬんだ？

——ソレハ「縮ム男」ノ予言ガ実現サレルタメダ！ とまったくグロテスクなほど昂揚して「縮む男」はいった。（略）そこでおれは新しく連中がおれを憎悪から殴り殺し、それによつて「縮む男」の予言が実現するように構想したんだ！

——殴り殺す？ そういうことを「自由航海団」はやらぬだろう。たとえば多麻吉がどんなに粗暴な男だとしても、と勇魚はいった。

——昨日までの「自由航海団」ならぬ。しかしいますでに変りつつあるよ。陽が昇つたらあらためて訊問がはじまつて、そしてなかんずく若い連中がおれを殺さずにはおかないだろう。そして「縮む男」の予言が実現されて、同時に「自由航海団」は、権力が叩きつぶし根絶やしにするほかには消滅しない真の団体になるよ。（十二章 軍事行動

を舞台稽古する) 16)

「暴力」に浸食されることが組織としての在り様を変える。国家から離脱することだけを集団のよりどころとしている、その意味で積極的な存在たり得ない「自由航海団」が、暴力を独占しようとする国家に、暴力で対抗する实在感のある集団となる。この「真の団体」にしようという「縮む男」の発言は、三島由紀夫が市ヶ谷駐屯地で自衛官に対して、自衛隊を現在のようない「御都合主義の法的解釈」¹⁷⁾によるごまかしによつて成り立つ集団、つまり存在するのに存在しないことになつてゐる軍隊から脱するように扇動したこととつながつてゐる。三島由紀夫による自衛隊員に対する「檄」には次のようにある。

自衛隊が目ざめる時こそ、日本が目ざめる時だと信じた。自衛隊が自ら目ざめることなしに、この眠れる日本が目ざめることはないのを信じた。憲法改正によつて、自衛隊が建軍の本義に立ち、真の国軍となる日のために、国民として微力の限りを尽すこと以上に大いなる責務はない、と信じた。¹⁸⁾

「真の団体」と「真の国軍」、「自由航海団」と自衛隊の現在が「真の」ものではないということに耐えられないという苛立ちが「縮む男」と三島由紀夫には共通している。

「洪水はわが魂に及び」での武装訓練は、「自衛隊」と呼ばれてゐる基地を脱走した自衛官によるものであり、三島由紀夫の主宰した楯の会が自衛隊での体験入隊を行つていたことと重なつてくる。もっとも「自衛隊」と呼ばれる青年が所属するのは「軍楽隊」であり、実戦部隊に所属する自衛官ではないということが、この武装訓練を中途半端なものに見せてゐる。また、自衛隊にあるのは正しくは音楽隊であり、あえて「軍」という言葉を用いたり、またその自衛官のことを「自由航海団」のメンバー伊奈子に「兵隊」と呼ばせ

ているのも、この小説が自衛隊に対して持つ悪意を表している。

自衛隊という武装した集団、日本国家の暴力を担う組織の問題は、三島由紀夫の自決を通して改めて大江健三郎にとつて重要なテーマとして浮上してきたわけである。軍事力・暴力を一手に独占しそれ以外の暴力を認めない国家に対して、いかに自由になりうるかという想像力がそこに働いている。それは同時に「自由航海団」の場合のように、集団と暴力を引き離すことがいかに困難であるか、という問題にいたらざるを得ないのである。

「同時代ゲーム」、**「五十日戦争」**をめぐる想像力

「洪水はわが魂に及び」の六年後、大江健三郎は藩権力やその後の大日本帝国に抵抗し続けた「村Ⅱ国家Ⅱ小宇宙」の歴史を物語る「同時代ゲーム」(一九七九年)を発表する⁽¹⁹⁾。一見、この二作の間に連続性は無さそうであるが、「村Ⅱ国家Ⅱ小宇宙」を作り出した人々は実は「自由航海団」の後継者として造型されている。

かれらの若さについては、指導者**壊す人**すらもが、二十歳を越えるかこえぬかの年齢に
おいて、遡行の旅に出たのだといわれる。もつともかれらの若さについては、二様の伝
承があった。(略)しかしもうひとつの伝承はこういつている。かれらがみな**壊す人**を
はじめ若年にしてそれぞれに、学問と技術において熟達し、藩政の改革に力をあらわし
たので、かれらは旧勢力と対立することになり、ついには敗れたのだ。そこで二十歳そ
こそこの、あるいはもつと若い者すらふくむ秀れた藩士たちが、一艘の船に乗り組んで、
かれら独自の未来を切り開きうる土地をめざしたのだと。(第三の手紙 「牛鬼」およ
び「暗がりの神」)⁽²⁰⁾

「旧勢力と対立」して「かれら独自の未来を切り開くために「一艘の船に乗り組ん」

だ若者たち、これは「自由航海団」が望みながら実現しなかった未来である。ただ「自由航海団」の船が実際日本を離れて船出したとして、実際は大洋の中で行き場を無くして難破するというのが考えられる結末である。現在、国家の領土ではない居住可能な土地が存在しない以上、彼らが生き延びるためには冒険小説の登場人物よろしく植民地になっている土地を救世主として解放して自分たちが新たな支配者になることであろう。たとえば明治初期の政治小説、矢野龍溪の「浮城物語」（一八九〇年）のように。しかし、それでは国家を運営する強者と変りがない。

「同時代ゲーム」が提示したもう一つの道は、国家の外側ではなく内側に存在する未知の領域へと入りこむという生き延び方である。

かれらの阿^{ナレン・シー}呆船は、海港から外へ追放されたものであるにもかかわらず、乗組みの被追放者たちは、水平線の彼方へむかい海の藻屑と消えるのを期待した藩権力の裏をかい、数しれぬ座礁の危険をおかしつつ沿岸をめぐり、ついにめざす隠れた河口に達するや、その川をひたす^すら漕ぎのぼり、船が川底をこすり始めると、艀装をとりはずし船底を改造してなおも遡行した。（第一の手紙 メキシコから、時のほじまりにむかつて）⁽²¹⁾

川を遡行した先に見出された、藩権力の及ばない山奥深くの谷間に「村Ⅱ国家Ⅱ小宇宙」の創設者たちは住みつき、江戸時代末までその独立を保ち続ける（ただし創建時に、先程述べたような先住者に対する暴力・支配が行われた可能性があることをこの小説は見逃してはいない）。

「村Ⅱ国家Ⅱ小宇宙」の歴史は段階的に国家の支配を再び受けるようになる過程である。明治時代に大日本帝国の支配を受けるようになった後は、同じ名前の人物を二人作る二重

戸籍のカラクリで村人の半数を帝国の支配（租税・徴兵）から逃れさせるようになる。しかし、そのカラクリも「五十日戦争」（「大日本帝国による金解禁と金輸出再禁止」から「五年たたぬうちに起った」とあるので一九三五年頃のことと考えられる）での大日本帝国軍隊に対する敗北の後に失われる。

「五十日戦争」は国家が有する軍隊・暴力を担う組織が、たとえば抗議行動や内乱の鎮圧といった形で国の内側に向って力を発揮しようことを示している。もちろん「村々国家」「小宇宙」の側からすればそれは内乱ではなく日本国との対外戦争ということになるのだが。そして、大日本帝国と日本国の連続性、またそれらを防衛する「大日本帝国軍隊」と自衛隊の連続性が意識されているのだろう。

しかし、この「五十日戦争」の持つ批評性は、直接の戦争の進み行きよりもその事後処理の一つを巡る部分にある。それは、「五十日戦争」の緒戦、人工的に引き起された洪水で大日本帝国軍隊の一個中隊が全滅し、百名以上の戦死者が生じたことにかかわる。

この作戦で死んだ将兵たちが、しかしその後も順当に昇進すらしめて、中国、東南アジアの戦場を転戦することになったのである。それも五年も、十年も、太平洋戦争の終結以後にいたるまで。かれら死せる混成一中隊の将兵に、こちらは生きている聯隊本部付きの一将校がその永い期間つきあいつづけた。将校は孤独な一室の事務机で作戦を練り、中国、東南アジア、アリューシャン列島、沖繩、そして様々な海域を通過する輸送船において、かれら混成一中隊の将兵が、今度は公表できる二度目の死をとげる機会を見つけ出した。そのようにしてすべての黒い洪水による死者に、名誉ある死に場所を選んできたり、その上で正規の戦死公報を送りとどけるのが、この将校の壮年時をすべてささげた仕事となった。（第四の手紙 武勲赫々たる五十日戦争）²²

「村Ⅱ国家Ⅱ小宇宙」との間の「五十日戦争」は、そのような内乱と呼ぶしかない出来事が生じたことを隠蔽するために、大日本帝国にとつてはあつてはならない、なかつたことにされた戦争である。「村Ⅱ国家Ⅱ小宇宙」においてですら、表立って語り伝えられていることではない。だからその際の戦死もなかつたことにされ、戦死者たちは生きている兵隊として扱われ続けた、という。しかも、グロテスクなまでに律儀なことに、彼ら死者の兵隊を公式に死なせることを専門とした将校がいたというのであるが、このあつてはならない存在を維持するための徒労のような仕事を、日本国憲法九条が存在する社会で、あつてはならないが存在するものとして自衛隊を存続させねばならない仕事と重ねることもできるだろう。自衛隊の存在・活動自体が徒労というのではない。その存在や軍隊としての暴力の可能性があつてはならないことにされ、それらを糊塗するために多くの言葉が費やされ、多くの人々が議論を取り交わしてきたことが空虚さを生みだしているということである。

しかし、一方でこの「五十日戦争」の後処理をした将校の姿は、そのような徒労に見える活動に世界の一部を活性化する力があることも示している。

しかし想像力が豊かでねばり強いこの将校の努力により、五十日戦争の緒戦で全滅した混成一中隊の、すべての死せる将兵たちが、たとえ永い戦場彷徨の後でなりと、ついに最後のひとりまで戦死公報によくその名を記しえたのであつた。このようにして将校は、死者たちとともに十年以上を働きづめに働き、それらの死者たちを転属させ、新しい任地から家族に通信を送らせることもした。そのためにかれは、なお生きていると信じられた死者たちにあてられる、家族たちの手紙を読んでは、いちいちの死者の家庭の事情に精通していなければならなかつた。そこでこの聯隊本部付きの孤立した一将校は、百組もの家族を持つ人間にひとしくなつた。(第四の手紙 武勲赫々たる五十日戦

死者に成り代わって家族との連絡を取り続けるこの将校は、もしかすると戦死した実際の兵隊たちよりもいい家族として振る舞っていたのかもしれない。もし兵隊たちが生きていたとしても、移動した戦地から頻繁に通信を送り、またそれに対する返信にまた返信を返すということは困難であっただろうから。それは、銃後の家族たちを活気づけ、かつ身内の戦死を準備された心で受け入れることもできただろう。ただ、繰り返しになるが、この仕事はあくまでも徒勞である。

これは特徴的な例であるが、「五十日戦争」における大日本帝国軍隊の行動・戦闘はそれ自体が徒勞である。「村Ⅱ国家Ⅱ小宇宙」はその半数の構成員が税金や兵役を逃れていたとはいえ、積極的に反国家的な行動、たとえば暴動・反乱を起したわけではない。戸籍上のトリックでないことになっている者の存在を、存在する者に戻すのが軍隊の目的だったわけだが、それが逆に戦死者、新たな存在しない人間を生み出した。徒勞がさらに徒勞を生み出す。

「同時代ゲーム」の「五十日戦争」が向う悪意は多方面で、たとえば森に潜む敵とのゲリラ戦に苦しむ軍隊という点では、ベトナム戦争でのアメリカの徒勞を連想することもできる。しかし、なかつたことにされた作戦行動・いなかつたことにされた戦死者という点を強調するなら、自衛隊の存在に向って書かれていふと言ふことができる。

もちろん、実際の自衛隊の活動は常に注目または宣伝され、かつ議論の対象になっている。しかし、たとえば文芸雑誌を舞台とする狭義の文学ジャーナリズムが自衛隊を正面から取り上げた代表作を持たないということは、見えているのに見えないことになっている。その不可視性的一端を表していると考えられる。たとえば『コレクション 戦争と文学 3 冷戦の時代』(集英社、二〇一二年十月)に収められている自衛隊を題材とした小説も、

野呂邦暢、浅田次郎といった入隊経験者のものに限られている。

自衛隊は未来にも存在し続ける

『同時代ザーム』の発表後、一九八〇年代大江健三郎は短篇小説を書き続けた。それらは『「雨の木」を聴く女たち』（一九八二年）から『僕が本当に若かった頃』（一九九二年）までの短篇集にまとめられており、同時期に発表された『懐かしい年への手紙』（一九八七年）などの長篇小説と共に、大江健三郎本人を思わせる語り手の作家「僕」の周囲で、過去や現在において生じた暴力や事件が描かれる。それらは世界全体の現在・未来に対する恐怖や不安、そして祈りと結びつけられて書かれているが、軍隊や自衛隊といった組織に直接かわるものではなかった。

それに対して一九九〇年代の初頭に連作として書かれた「治療塔」⁽²⁴⁾「治療塔惑星」⁽²⁵⁾の二作（三部作として構想されたが三作目は書かれなかった）では、国家の存続も危うくなった世界においてもなぜかわらぬ自衛隊は存在させられている。

「近未来SF」と題された両作は二十一世紀半ばの時代が舞台である。米ソ超大国同士の世界中を巻きこんだ核戦争は免れたものの、各地で起った地域核戦争や原子力発電所の事故の続発により、汚染された地球は人類が住み続けるのに不適切な場所と見なされるようになった時代。ごく一部の「選ばれた者」だけが、植民可能と判断された惑星へと「大出発」を行い、地球には選ばれなかつた「落ちこぼれ」と呼ばれる人々だけが住んでいた。しかし、新天地への植民に失敗した「選ばれた者」たちが地球に帰還した、というところから小説は始まっている。

このような世界観であるにもかかわらず、日本の自衛隊は存在し続けている、という。しかも、地球に残った自衛隊は当然「落ちこぼれ」の側に属するはずなのに、律儀にも「選ばれた者」たちの出発の警備をしていた、という。

工場群は大出発のための宇宙ロケットを組み立てる目的の、わが国では中心的な機構だった。塙の小父さんを先頭にす抵抗グループは、自衛隊員の警護網をかくぐつて潜入し、すでに完成していたスターシップにこそ近づけなかったが、工場群の中核部と燃料庫を爆破することができた。⁽²⁶⁾

このような混乱の時代に自衛隊が自衛隊のまま存在し続けていると発想すること自体が、そもそも異様な想像力だと言える。たとえば、相続く地域紛争に備えて明確な軍隊として姿を変えているとするのがステレオタイプの発想ではないだろうか。ただ、やはり実在の自衛隊との差異はあり、小説中に登場する自衛隊が有する暴力は防衛のために国外の敵に向けられず、日本の国民に向っている。「大出発」に反対する人々の活動はゲリラ化し、使用される宇宙船の破壊を目指すものになっていくのだが、彼らと戦い殺傷したのが自衛隊だというのである。おそらく現実では未だ実行されたことのない治安出動の名目なのだろう。

塙の小父さんの指揮するゲリラ隊は、襲撃の際、この宿舎には自衛隊員でなく一般労働者が寝泊まりしているという情報を得ていたので、燃料庫を狙いながら、宿舎を的から外すように気をくばった。しかしゲリラ隊は、ほかならぬ当の宿舎から撃つて来る機関銃に退路を断たれた。⁽²⁷⁾

「大出発」の後もこの自衛隊は存在し続け、「選ばれた者」たちによる専制に協力していく。かつての自衛隊と一線を画した、より戦争に深く関わる存在として。あくまでも大江健三郎の小説世界においては自衛隊は暴力や恐怖と結びつく存在なのである。

一方「治療塔」「治療塔惑星」が書かれていた一九九〇年代の初頭は、世界情勢の変化が日本社会における自衛隊の位置を変え続けていた時代であった。一九九〇年のソビエト連邦の崩壊による冷戦の集結は、対ソ防衛という目標が無いまま現状の人員・装備が必要なのか、というテーマを自衛隊を問題化する文脈に投げかけた⁽²⁸⁾。

当時の状況からすると、自衛隊の存在は認めるとして、日本・世界の情勢から見てありうべき運用の仕方はどのようなものかということが議論の対象になりえたはずだが、その議論が十分に展開される前にイラクのクウェート侵攻からの一九九二年の湾岸戦争の開戦という事態が生じ、自衛隊の国際貢献の是非に議論の中心は流れていった。その後ペルシア湾への掃海艇派遣、カンボジアへのP KO派遣、と自衛隊は実績を重ねるが、一方で、その後のイラク戦争への派遣にいたるまで自衛隊の海外派遣はどこまで可能か、どこまでの行動が許されるのかということ、さらには現実的に自衛隊の「防衛」のための装備と「国際貢献」のための装備の齟齬といった、運用面が主に問題化されていった⁽²⁹⁾。

この間、軍隊の本来の目的である戦闘行為・暴力行使とは関係の無い活動が議論の対象であり続けた。「平和貢献」という名目で行われたペルシヤ湾への掃海艇派遣やカンボジアP KO以降の相次ぐ海外派遣は、自衛隊の存在の意味を変えていった。一九九九年の「周辺事態法」や二〇〇三年の「イラク特別措置法」などの法律の整備も繰り返された。戦地またはその周辺に赴き続けながら、決して戦ってはならない武装した集団、それが近年の自衛隊の置かれた立場である。

自衛隊の持つ暴力・攻撃性は去勢されているのだが、これを天皇に対する批判の論調の変化に重ねることもできるだろう。昭和天皇の戦争責任は問われるべきか否か、という問題設定はその死によってうやむやになり、一九八九年以後は新しい皇室はどのようなべきかがテーマとなってきた。一九九〇年の秋篠宮の結婚、一九九三年の皇太子の結婚以後は、さらに皇室内での人間関係や皇位継承に問題は無いか、という運用面が問題化され

ていった。存在そのものは是非から、存在のありようへ、そして存在を自明のものとして運用面に議論が移っていく、これは自衛隊の戦後の問題系の変化とよく似ている。大江健三郎が明に暗に天皇制と自衛隊について書き続けてきたのは、両者に共通する、この存続のための問題系の詐術に敏感に反応したためと考えられる。

大江健三郎の天皇制に対する批判については、彼の思想を問題にする上で既に検討の対象となってきた。それと関連させて、前号の拙論では主に大江健三郎の小説にどのよう原子力についての言及と批評性が読み取れるかを論じた。本論では、それに加えて国家の担う暴力そのものと関わる自衛隊という組織のあり方に対する批評性をテーマとした。

ここまで見てきたように、大江健三郎の作家活動は暴力に対する恐怖・嫌悪の激しさ・執拗とも言える持続性から、原子力・天皇制に加えて自衛隊に対しても独特な想像力を働かせてきた。ただ、独特とは言え、それは時代の思潮と隔絶しているわけではなく、たとえば時代ごとの自衛隊が置かれた地位の変化に沿っている部分もある。その点を強調するならば、大江健三郎もまた巨大な妥協点の生成に一役買っていることになる。

ただ、大江健三郎の小説がわかりにくいものになっているのは、おそらく積極的にその役を果すことを避けるために、批評性を明らかに発揮させていないところにある。読者が大江健三郎という小説家に賭けるのなら、そのわかりにくさをこそ信用して賭け金を積むべきなのだろう。

- (1) 「大江健三郎と原子力、そして天皇制」『述』5（論創社、二〇一二年三月）。
- (2) たとえば、自衛隊の戦力や装備、関連する法律を話題にした最近の関連書籍としては、加藤健二郎・古是三春『意外と強いぞ自衛隊！ 解き明かされた55の真実』（徳間書店、二〇〇九年三月）、中村秀樹『自衛隊が世界一弱い38の理由』（文藝春秋、二〇〇九年五月）、清谷信一『防衛破綻 「ガラパゴス化」する自衛隊装備』（中央公論新社、二〇一〇年一月）などがある。
- (3) 東北・東日本大震災直後の自衛隊の救助活動については、たとえば須藤彰『東日本大震災 自衛隊 救援活動日誌——東北地方太平洋沖地震の現場から』（扶桑社、二〇一一年七月）がある。
- (4) 「戦後世代のイメージ」『週刊朝日』一九五九年一月四日～二月二十二日（雑誌掲載時のタイトルは「無分別ざかり」）。引用は『厳粛な綱渡り』（文藝春秋、一九六四年三月）二十三頁。
- (5) 「現実の停滞と文学」『シンポジウム発言』（河出書房新社、一九六〇年三月）四二頁。
- (6) 本節での自衛隊に関する記述は佐道明広『戦後政治と自衛隊』（吉川弘文館、二〇〇六年五月）を参考に行っている。
- (7) 自衛隊の存在が日本経済の末端にまで深く根ざしている現状については島本滋子『ルポ労働と戦争——この国のいまと未来』（岩波書店、二〇〇八年十一月）を参照。
- (8) この写真は現在もたとえばイギリスの DaiMail のサイトで見る事ができる。
<http://www.dailymail.co.uk/news/article-1366155/Japan-earthquake-tsunami-4-month-old-baby-girl-father-reunited-Ishinomaki.html> 震災の一年後には二人の再会が話題になった。
<http://www.yomiuri.co.jp/feature/eq2011/news/etc/20120311-0YT8T00336.htm>
- (9) たとえば久江雅彦『日本の国防 米軍化する自衛隊・迷走する政治』（講談社、二〇一二年一月）や半田滋『3・11後の自衛隊—迷走する安全保障政策のゆくえ』（岩波書店、二〇一二年七月）を参照。
- (10) たとえば半田滋『自衛隊S北朝鮮』（新潮社、二〇〇三年八月）を参照。

海上自衛隊OBによる『自衛隊が世界一弱い』³⁸の理由』(前出)の他、陸海空各自衛隊OBによる座談会本である田母神俊男・松島悠佐・川村純彦・勝谷誠彦『国防論』(アスコム、二〇〇九年五月)がある。

『洪水はわが魂に及び』(新潮社、上下巻、一九七三年九月)。引用は『大江健三郎全作品』4(新潮社、一九七八年一月)による。

『大江健三郎全作品』4(前出)一一九頁。

『宗教的な想像力と文学的な想像力』一九九七年五月十日に行われた講演の記録、『鎖国してはならない』(講談社、二〇〇一年)所収。

杉山隆男『「兵士」になれなかった三島由紀夫』(小学館、二〇〇七年八月)十六〜十七頁。

『大江健三郎全作品』4(前出)一九九〜二〇一頁。

『決定版三島由紀夫全集』³⁶(新潮社、二〇〇三年十月)四〇三頁。

同前四〇三頁。

『同時代ゲーム』(新潮社、一九七九年十一月)。

同前一九四〜一九五頁。

同前二十五頁。

同前二六五〜二六六頁。

同前二六六〜二六七頁。

「再会、あるいはラスト・ピース」として『ヘルメス』第²⁰号(一九八九年七月)〜第²⁴号(一九九〇年三月)に掲載、単行本は『治療塔』(岩波書店、一九九〇年五月)。

『へるめす』第⁹号(一九九一年一月)〜第³³号(一九九一年九月)。単行本は『治療塔惑星』(岩波書店一九九一年十一月)。

『治療塔』二四頁。

同前八八〜八九頁。

(28)

たとえば前田哲男編『自衛隊をどうするか』（岩波書店、一九九二年一月）といった本が出版されていた。

(29)

佐々木芳隆『海を渡る自衛隊——PKO立法と政治権力——』（岩波書店、一九九二年十一月）、および半田滋『「戦地」派遣 変わる自衛隊』（岩波書店、二〇〇九年二月）まで、二十世紀末から二十一世紀初めにかけての時期は、拡大する自衛隊の活動内容に議論が後手後手を引く状況だった。ちなみに岩波書店は持続的に自衛隊関連の書籍を発行しており、それらの書籍のテーマが自衛隊批判の時期毎の特質を典型的に示している。

（二〇一二年九月稿、十二月加筆修正）